第６回立教大学諮問委員会記録

日　時：2017 年 3 月 10 日（金）14：00～17：00
場　所：太刀川記念館 2 階会議室
出席者：＜委員＞　林　良造　（明治大学特任教授 国際総合研究所長、東京大学客員教授）
佐々木順子（ザルトリウス・ジャパン、ザルトリウス・ステディム・ジャパン 社長）
中村富安　（独立行政法人日本貿易振興機構 参与）
一力雅彦　（株式会社河北新報社 代表取締役社長）
Sergio Inclan　（在日メキシコ大使館公使）
（ご欠席）橘フクシマ咲江　（G&S Global Advisors Inc. 代表取締役社長）
＜大学＞　吉岡知哉（総長）、白石典義（統括副総長）、加藤睦（副総長）、原田久（副総長）、山口和範（副総長）、松井秀征（総長室長）
事務局：金刺信一（総長室事務部長）
小圷守（総長室次長）、田代真美（秘書課長）、佐藤雅信（教学改革課長）、藤枝聡（総長室調査役）長野香（広報課長）、古髙由季（国際化推進機構課員）、樋口萌（国際化推進機構課員）

１．提言への対応状況

標記について、白石統括副総長より、配布資料「前回の提言への対応状況」にそって、報告がなされた。

（１）国際化関連の課題
①グローバル・イシューを学生が肌で感じられるプログラム等の充実
・2016 年度から全学共通科目として本学客員教授・ジャーナリスト池上彰氏による「国際情勢を読み解く」を開講。
・立教、明治、国際の３大学による「国際協力人材育成プログラム」を開講。

②スチューデントボディ制度等、学生が学業や日常生活を支え合う仕組みの充実
・これまでに経営学部 BLP 及び全学の GLP の SA 制度により実践。
・2017 年度から GLAP において全員が寮生活制を開始。

③GLAP における自ら学ぶ意欲を持った学生の入学促進
・国際コース選抜入試において独自の選抜を実施。

④ビジネス・外交等、国際社会で活躍する人々にサポートネットワークの構築
・「立教グローバル／ローカルキャリア支援ネットワーク（GLC）」を発足。

（２）全般的課題
①「Rikkyo Learning Style」の推進による、主体的かつイノベーティブな人材輩出
・2017 年度から新ｅポートフォリオシステムが稼働。学生自らが、４年間全体の目標や各学修期の目標を設定し、入学から卒業まで目標に向かって主体的に学び続ける仕組みを目指す。

②学生の「顔」が見える広報の展開
・2017 年３月に大学公式サイトのリニューアル完了。学生インタビュー記事（学部を選んだ理由、入学後の感想等）を豊富に掲載。
・2017 年度大学案内では全学科紹介ページに学生の写真とコメントを掲載。

③学院及び大学執行部の構成員におけるダイバーシティ化の推進
・現在、教員については、女性の学部長が１名、各センター役職者 45 名中、女性が 10 名。職員では女性の部長が１名、副部長が３名。
・中長期的な課題として捉えており、引き続き具体的対応を進める。

④観光立国を目指す日本における、観光学部の更なるプレゼンス向上
・世界観光機関（UNWTO）の賛助会員へ申請。
・「観光系大学コンソーシアム（仮称）」を組織して検討。

⑤VISION や行動計画の進捗共有、フィードバックの仕組みづくり
・VISION 推進委員会などを通じて進捗状況を共有。

⑥「陸前高田サテライト」構想の推進
・2017 年 4 月 25 日に「陸前高田グローバルキャンパス」を開設予定。
・プレイベントとして、2 月 25 日に本学客員教授・ジャーナリスト池上彰氏による記念講演会を開催。

２．RIKKYO VISION 2024、2017 年度大学行動計画

吉岡総長より、主に RIKKYO VISION 2024 における 3 つの「Value」それぞれのアクションプランの進捗状況等について報告がなされた。

（1）Value 01： Lead for Learning
①サービスラーニングの全学的推進

・2016 年度に立教サービスラーニングセンター（RSL）及び社会連携教育課を開設。「立教サービスラーニング」講義系科目と実践系科目の２種類を開講。講義系科目では、「大学での学び方」「シティズンシップ」「他者との協働」「公共的な課題解決」「政治参加」「NPO 運営」など、「立教サービスラーニング」が重要と考えるテーマについて、理論と事例の両面から学ぶ。実践系科目では、実際に国内外のフィールドに出掛けて、各科目のテーマについて「体験」を知識や理論に関連付けながら、学問的に学びを深める。
・2017 年度は「RSL プロジェクト・プランニング」（アクティブ・ラーニング科目）を新規開講。

②グローバル教養副専攻 Discipline コース開設に向けた準備
・学部の専門的な学びに加え、学生自身の興味・関心に応じてもう 1 つのテーマを選んで体系的に学ぶ。必ず海外体験を行う。
・「Arts & Science Course」、「Language & Culture」の２コースは 2017 年度から登録開始。
・「Discipline Course」については、「日本語教育」と「データサイエンス」の２つのテーマ開設に向けて準備中。

（２）Value 02： Lead for Globalization
①「海外への学生派遣」と「外国人留学生の受け入れ」の拡大
・2014 年度は 921 名、2015 年度は 1,014 名、2016 年度は約 1,100 名の学生を海外に派遣。
・留学生受け入れ数は、2014 年度 5 月現在で 649 名、2015 年度同 708 名、2016 年度同 851 名。

②「海外協定校を 300 大学」と「全ての入試で英語 4 技能試験導入」
・2015 年度は海外大学 20 校と、2016 年度は 36 校と新規交流協定を締結。2016.10.20 現在で 165 校（185 協定）。
・「英語４技能試験」は、国際コース選抜入試、一般入試（全学部）グローバル方式に導入。指定校、関係高についても推薦要件に追加の方向。

③「GLAP（Global Liberal Arts Program）」開設
・少人数によるリベラルアーツ教育、全員必修の２年次秋学期からの海外リベラルアーツ校への留学、帰国後の専門教育として「Humanities」「Citizenship」「Business」という 3 分野から選択し深く学んでいくプログラム。2017 年度開設。20 名程度が入学予定。

（３）Value 03： Lead for Future

①「学士課程教育」の変革

・2016 年 4 月入学者より、新しい学びの体系「Rikkyo Learning Style」を導入。2017 年度からは「Rikkyo Learning Style」 を支える e ポートフォリオシステム「新立教時間」を活用開始。

②「立教グローバル／ローカルキャリア支援ネットワーク」の構築

・2016 年 5 月に「立教グローバル/ローカルキャリア支援ネットワークを発足させ、第 1 回目の会議を開催。多種多様な業界で活躍する 30～40 代の 24 名（男性 12 名、女性 12 名）の卒業生から構成。

③「東京オリンピック・パラリンピック」プロジェクトの推進

・ブラジルオリンピックチームによるキャンプ地としての活用を決定。

・室内温水プールがナショナルトレーニングセンター競技別強化拠点施設に指定。日本身体障がい者水泳連盟への貸出しも決定。

・大会ボランティア・都市ボランティアの募集に向けた準備を開始予定。

３．2017 年度以降の課題【領域全般的な課題】［諮問委員からの提言］

- 立教大学陸前高田サテライトの推進にあたり、社会的に著名な方とのネットワークも広げて取り組みを進めることが重要である。
- 新しい e ポートフォリオシステム「新立教時間」について、学生が積極的に活用するための方策を具体化することが重要である。
- キャンパスの国際化について、量的成果をさらに上げるためにも、継続的なイベント実施や IT メディアを活用したイベントの再現化等が重要である。
- 留学生数等、国際化の量的実績について優れた成果が出ているので、今後はこれを持続するとともに、質的な成果についても具体的な課題と目標を設定し、取り組むことが重要である。

４．スーパーグローバル大学創成支援中間評価

立教大学におけるスーパーグローバル大学創成支援事業の 2014 年度から 2016 年度までの取り組みと進捗状況について、諮問委員会による中間評価を行った。なお、委員会の開催に先立ち、各委員は大学より事業の進捗状況等について説明を受けており、事前に出された意見・評価を踏まえて、引き続き意見交換が行われた。事前の説明内容は、以下の通り。

スーパーグローバル大学創成支援事業構想全体の進捗状況

（１）カリキュラムの改革

・2016 年 4 月「Rikkyo Learning Style」導入

・2016 年 4 月 グローバル教養副専攻開設

・2016 年 4 月 TESOL-J、Dual Language Pathway、国際社会コース開設

・2016 年 9 月 国際連携大学院プログラム（リンケージプログラム）開設

・2017 年 4 月 Global Liberal Arts Program (GLAP) 開設

・2016 年 6 月、2017 年 1 月 短期日本語プログラム実施

（２）学生の意識の改革

・海外派遣プログラムの積極的な開発

・協定校数の増加

・グローバルラウンジ設置による国際交流機会の創出

・「グローバルフェスタ」等の留学促進イベントの開催

（３）ガバナンスの改革

・2015 年 4 月 国際化推進機構の設置

・2014 年 4 月 海外事務所の設置

・2016 年度 一般入試「グローバル方式」の導入（４技能英語資格・検定試験の活用）

・2016 年度 秋季入試「国際コース選抜入試」の導入

・2015 年度 外国人留学生入試 WEB 出願導入

・2014 年度 若手職員向け海外研修の新設

・2016 年度 海外研修参加者による留学フェア当への参加

（４）その他の取り組み

・スーパーグローバルハイスクールとの連携イベントの開催

・祈りの部屋（Prayer Room）の設置

５．各委員からのスーパーグローバル大学創成支援事業への提言

（１）「カリキュラム」の改革（GLAP、リンケージプログラム、短期日本語プログラム等）

- 学士課程を中心に、GLAP、RIKKYO Learning Style（立教学士課程統合カリキュラム）、リーダーシップ教育の全学展開など、計画的に進められている。
- いずれも開設直後のため評価は難しいが、特に GLAP は少人数の英語によるリベラルアーツプログラムの先導性ある取り組みのため、１期生に対してきめ細やかな指導と、卒業後のキャリアも含めた支援が重要である。
- GLAP については、外国籍の学生の割合を高めるなど、多様性の確保を検討すべきである。

- GLAP について、卒業後の受け皿として専門職大学院との接続性を意識した設計を検討してはどうか。
- 国際連携大学院プログラム（以下、リンケージプログラム）では、協定校、外国政府との他に、現地企業との連携なども視野に入れるとより効果が期待できる。
- リンケージプログラムについては、新興国においてニーズのある法整備等に関するコースの設置も検討してはどうか。

（２）「学生の意識」の改革（学生の海外派遣、留学生の受入れ等）

- 海外に派遣する学生や、留学生のそれぞれについて、日本人としてのアイデンティティや、日本語・日本文化や企業慣習などの理解を促す仕組みをカリキュラムの中で計画すべきである。その点で、「グローバル教養副専攻」は、日本に関する学びが含まれており、考えられたプログラムである。
- 海外プログラムの目的の一つは、学生の自立を促し、自らの経験や価値観に無い“衝撃”を早い段階で経験させること。そういった意味で、欧米中心ではなく、アジア、中南米やアフリカなどの地域でのプログラムの充実も必要である。
- マインドセットが重要であり、海外を経験し“気付き”を得た学生が、帰国後に学ぶことができる機会を用意しておくことが重要である。
- 留学経験者の体験を共有する機会の創出。また、卒業後のキャリアも含めたロールモデルの提示。学生に“憧れ”を抱かせ、内発的な動機を引き出す工夫を検討すべきである。
- 卒業までに全員に海外を経験させるという目標については、小・中・高・大と続く一貫連携教育の強みを活かし、大学入学前の段階から意識の醸成や機会の創出を検討すべきである。
- 学生の海外派遣の増大に伴い、在外日本大使館等と連携し、安全の確保や情報交換を行うとよい。
- 卒業後の留学生も含む校友ネットワークを活用すべきである。

（３）「ガバナンス」の改革（組織改編、海外事務所、入試制度改革等）

- GLAP などの先導的プログラムの成果を、全学に還元する仕組みを検討すべきである。
- 補助事業の支援期間終了後も自立的なプログラムになるよう、適切な財政運営を検討すべきである。
- 海外事務所間のネットワークを構築し、課題や効果的な取り組み方法を共有する機会を持つとよい。

- 学生、教職員ともにさらなる多様性の確保をすべきである。少数派が一般化するためのティッピングポイントがあり、性別、年齢、人種など、ある程度の強制力を持って人材を抜擢し、改革を促すことも検討の余地がある。
- 国内の高校生の数が減少し、今後優秀な学生の獲得が難しくなっていく中で、スーパーグローバルハイスクール（以下、SGH）との連携は重要な取り組みである。
- 留学生数の増加を受けて、いずれの事務部局も英語で学生対応が可能なように、留学生の受入れ体制を強化する必要がある。
- “国際化”のみならず、“多様性”という視点で改革を進めることも重要である。

（４）全体評価

構想、全体の計画は順調に進んでいる。なお、以下の４点については、強く意識しながら取り組みを継続していく必要がある。

１）学部カリキュラム改革の柱であるGlobal Liberal Arts Program（GLAP）については、海外の大学院進学も視野に、1期生の成功体験を共有することが重要であり、きめ細やかな指導を行うべきである。

２）学生の意識については、海外に派遣する学生や、留学生のそれぞれについて、日本人としてのアイデンティティや日本語・日本文化等への十分な理解を促すことが重要であり、グローバル教養副専攻等のカリキュラム整備を進めるべきである。

３）ダイバーシティの実現に向けては、ガバナンス及び全員留学の文化を根付かせるために、ティッピングポイントを意識した改革が重要であり、人材を抜擢し、改革の促進に向けた取り組みを行うべきである。

４）国際化に向けた取り組みに加え、立教の伝統であるリベラルアーツ教育を打ち出した改革を推進していくべきである。

以　上